

回顧録

Reminiscences

ひるま矯正歯科
院長・晝間登喜男

3回連続の今回は第2回です。写真は古いアルバムの中から見つけた恐らく唯一の診療中の写真です。2004年に診療室を移転するまで、白衣や診療台など基本的な診療スタイルはほとんど変えていませんので、写真ではあまり昔の感じはありませんが、髪の毛や口髭の色が歴然と事実を物語っています。当年38歳。



立川で最初の矯正専門医院

日本で初めて矯正歯科専門医院がオーブンしたのは、ひるま矯正歯科が開業するほんの10年ほど前に過ぎません。歯科矯正そのものが世間によく知れ渡っていない時代で、開業した時はまだ専門医院が全国で60軒程度しか存在せず、当院が立川地域では最初の専門医院になりました。ちなみに、矯正

歯科という診療科名の標榜(名称)はこの年の法律改正で許されるようになりましたので、当院ははじめから「矯正歯科」のついた医院名で開業することができます。当時、まだ矯正歯科がいかに人口に膚浅していなかつたか、そのエピソードを第1号の「ひるまときおのホッピとひと息」に書きましたが、矯正歯科百花繚乱の今の時代から思うとまさに隔世の感がします。

代当时、日本の公立小中高等学校では土曜の午前中はまだ普通授業でしたが、基地内の学校は土曜日は授業がありませんでしたので、土曜の午前中は基地からの患者さんが診療室を占めるようになりました。彼らは福生(横田基地)から診療がてら立川に遊びに来るため、待合室は友達で溢れそのあまりの騒がしさに「Shut up」と怒鳴ったこともあります。後日、大人になってから当院に矯正相談に見えた日本人女性が、当時、土曜の午前中に当院に初診で来たとき、アメリカばかりの待合室に圧倒されそのまま帰ってしまったという話を聞きました。

何人のアメリカ人を治療したか定かではありませんが、彼らのほとんどが日本語をまったく話さないため、治療費や治療方針を説明する時には緊張しました。最近こそ日本人でも父親が付き添つてすることは珍しく

当時の難症例、現在は治療容易に

ありませんが、当時アメリカ人はほとんど父親が同席するので、狭いカウンセリングルームにニコリともしない大男が横にいるだけで威圧感を感じたものですが、付き合えば皆いい人たちでトラブルやクレームもなく、みな「Good job」といわれて完了でてきたことは幸いでした。このころ必要に迫られて勉強したのが東後勝明の「NHKラジオ英会話」でした。テキストのskit(寸劇)を丸ごと覚えて四六時中繰り返していたのですが、これが診療だけでなくのちに何度も訪れるアメリカ矯正学会への旅行に大いに役立ちました。

左一番下の写真は、数多いアメリカ人矯正患者の中でももつとも記憶に残る患者さんで(1982年、16歳)、当時の矯正としては

抜歯しなければ矯正できない症例でしたが、横顎から分かるように口元を絶対に引っ込めてはいけないという、日本人では考えにくく難しいケースでした。この治験例は研究会の仲間内でも話題になり、オフィスに訪ねくる若い矯正医たちにも考える材料を与えたケースでしたが、25年後の現在では、矯正歯科医療の発展によりほとんどの矯正医がまったく異なる治療方針で、もつと容易に治療だけではなくのちに何度も訪れるアーティファイア式をお蔵にしまっていきます。このファイア式をお蔵にしまって以来引き合いに出すことはもうありませんが、矯正歯科臨床の幕引きを意識したのはその頃からでした。



装置の説明をしているところ。今とあまり変わらない光景ですが26年前の写真で、彼女は非常に有能なスタッフでした。



1980年頃のビルの前から駅方面を見た写真。左上の当院の看板にアメリカ人患者のために英語(Orthodontic office)が入っています。



2000年、同じ所からの写真。駅ビルも建ち街の様相は一変、看板も診療室の移転にともなって今は撤去。



やがて日本はバブル景気へと突き進み、対ドル円が高騰するとともに福生周辺にも矯正歯科医院が進出してきたこともあって、横田基地からの患者はやがて途絶えていきました。日本橋渡しをしてくれた盟友・加納君は、R.M.社の部長に登りつめたものの志すところあつて10年ほど前に退社、今は家族とともにオーストラリアで暮らしています。

80年代はアメリカ人の治療も

この時期、医局時代からの付き合いで開業にも全面的に協力してくれたR.M.社の加納君という人物があり、英語が堪能な彼の勧めもあり、横田基地の矯正診療室によく出入りし、そこの矯正歯科医やスタッフと親しく交流するようになりました。加納君とともに将校ハウスでよくご馳走になりましたが、彼らがオフィスで遊びに来ることもしばしばあり、一時期水曜の診療後の2時間、スタッフのひとりに英会話を教えに来てもらつたこともありました。彼らは軍の奨学金で歯科大学を出ており卒業後の義務として基地に勤務していたため、任期が明けるとすぐ本国に帰つてしまします。そのため頻繁に矯正医が変わることもあって、英会話のレッスンもいつの間にか沙汰やみになりました。

当時、横田基地には軍人2万人と軍属1万人(軍隊内の非軍人、civilian)が生活しており、基地内では軍人とその家族の矯正治療は無料でしたが、civilianの矯正治療は有料でも患者数が多くてほとんど受け付けてもらえない状態で、それらの患者さんが当院に来院するようになります。1980年